

### 3 天王山式土器と天王山式の文様要素を取り入れた吉田式土器について

今回の調査では、東北地方に分布する天王山式土器そのものと、天王山式土器の文様要素を取り入れた吉田式土器がいくつか出土している。以下これらについて若干の説明を行っておきたい。

1～5（第96図）27号住居址覆土上層より出土した天王山式土器で、接合はしないもののいずれも同一個体と考えられる。甕型土器の破片で、口縁から頸部にかけては、籠描の密な重菱形文を施文し、胴部には連繫渦文を施文している。各文様帶間の区画は沈直線文によってなされており、交互刺突文は認められない。地文としての縄文は認められず、外面は縦方向のハケ整形後施文されている。内面胴下半は、縦方向の一見ヘラケズリかと思われる強いナデ整形がなされ、胴中位以上は全体にナデ整形で仕上げられているようである。胎土も異質で明らかに搬入品と考えられる個体である。

6 16号住居址より出土した甕の胴部下半の破片で、今回の調査で出土した資料の中で、唯一附加条縄文が施文される個体であり、条は横走する。内面の調整は目の粗いハケ整形がなされ、胎土からも明らかに搬入品と考えられる個体である。

7・8 検出面から出土したもので、接合はしないが同一個体と考えられる。甕の頸部下端から胴部上半にかけての破片で、上端に交互刺突文が施文され、その下に右回りのおそらく等間隔止め簾状文が一帯、さらにその下に櫛描波状文が施文されている。摩耗のため調整等の詳細は不明であるが、在地の吉田式甕形土器の頸部文様に、交互刺突文が取り入れられたものである。交互刺突の原体は、籠状工具先端の可能性が高い。

9・182 20号住居址より出土した小型の甕もしくは台付甕の頸部～胴部上半の破片で、9は182の拓影である。頸部には3本の櫛状工具による左回りの等間隔止め簾状文を2帯施文し、その下に沈線の施文はないものの、円形竹管状工具によって上方と下方から交互に刺突を行った交互刺突文が施文されている。交互刺突文以下胴部にかけては、二本一組の籠状工具による沈線が3組描かれる。この沈線がコの字重ね文になるか不明ではあるが、そうであれば第3次調査4号住居址出土の174（同報告書図34）と同一個体である可能性がきわめて高い。

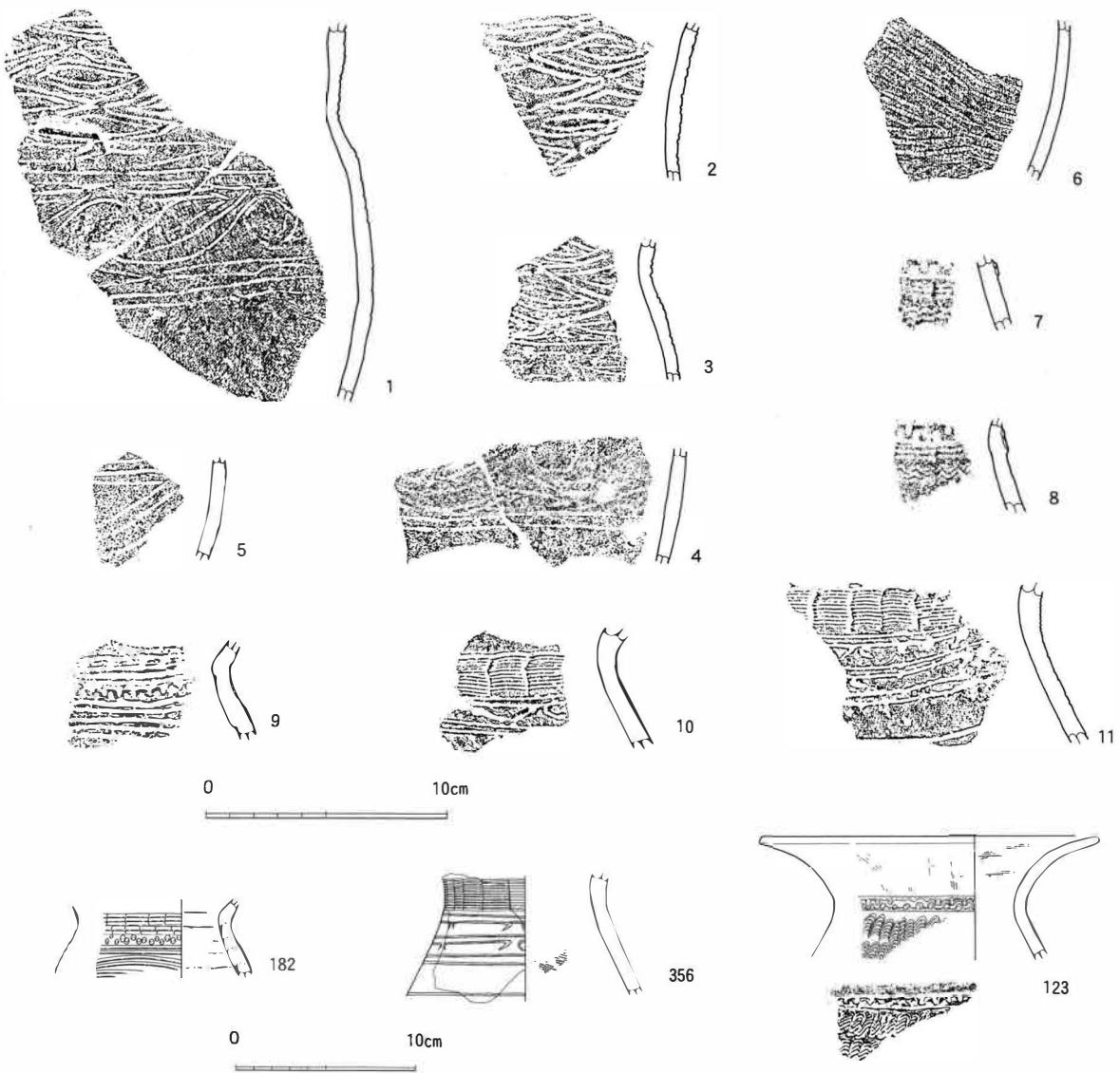
内面は粘土帶接合痕を顕著に残しナデ整形されるのみで、吉田式としては特異な調整である。

10・11・356 1次調査5号住居址より出土した壺の頸部から胴上部にかけての破片で、10・11は356の拓影である。頸部には右回りの等間隔止め簾状文が一帯施文される。頸部下には、二本一組の籠状工具による沈直線文が少なくとも3組認められ、二本一組のうち下の沈線の数か所を短い弧状の沈線で切ることによって工字文風に仕上げられている。外面無文部はハケ後丁寧にナデ整形され、内面胴部はハケ整形される。在地の吉田式壺の頸部下文様に、天王山式的な工字文風施文が取り入れられたものといえ、胎土・調整手法ともに吉田式の中で理解できる個体である。

123 17号住居址から出土した壺形土器口縁部破片で、口径は19.0 cmを測る。頸部には二本の沈線を施文したのちに、円形の竹管状工具先端による交互刺突文が施文され、その下には櫛描波状文が二帯認められる。口縁部外面は斜～縦方向のハケ整形後強い横ナデによって仕上げられ、口縁部内面は横ハケ後軽いヘラミガキ・赤彩がなされる。頸部径が太い点やや異質ともいえるが、調整・胎土とともに吉田式の範疇でとらえられるものであり、吉田式壺の頸部文様に天王山式の交互刺突文が取り入れられたものといえる。

また、天王山式土器との明確な関係は不明であるものの、関連が想定できる資料として以下のものがある。

11号住居址23（第10図）の甕形土器は、胴部中位に最大径を有し、頸部は内傾して立ち上がった後に、受け口ぎみに内湾して立ち上がる口縁部へ移行する形態を呈し、形態の上では、天王山式の影響を受けている可能性も考えられる。文様は頸部に二帯の櫛描直線文を施文し、その間に櫛描波状文を一帯施文しており、吉田式の甕の文様構成としてはやや異質ともいえる。

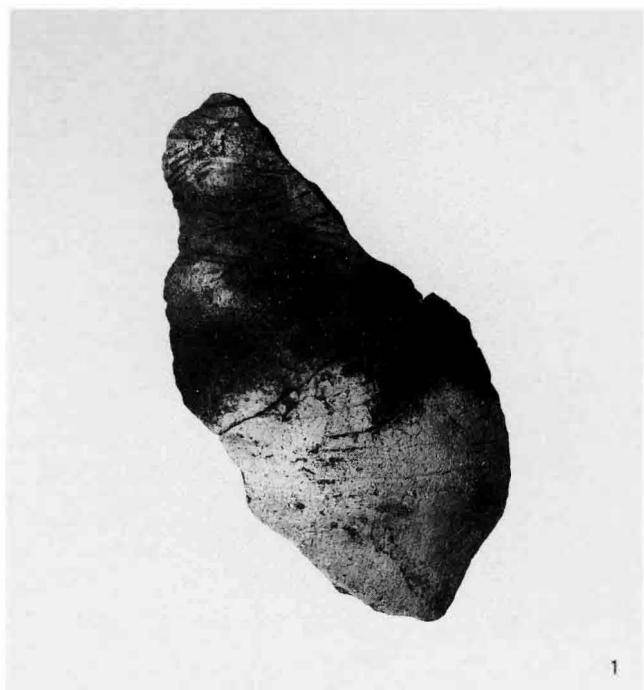


第96図 天王山式土器と天王山式の文様要素を取り入れた吉田式土器

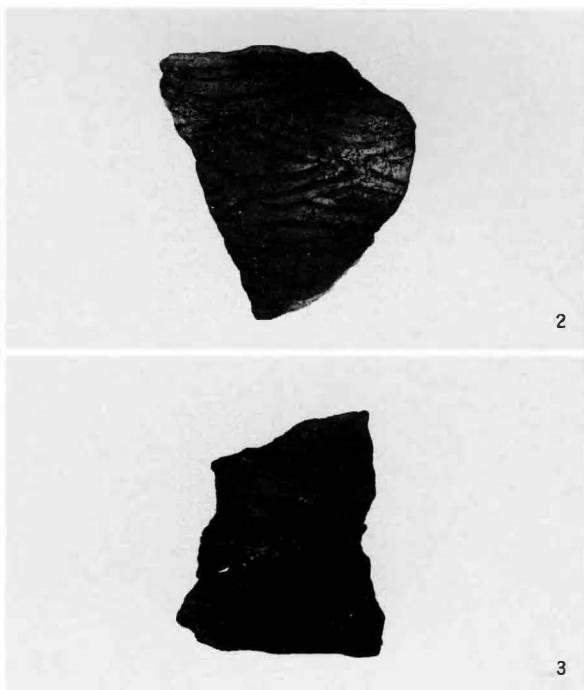
11号住居址24（第10図）、25号住居址259（第64図）の甕形土器は口縁部に、頂部に範刻みを加えた山形突起を有する。山形突起自体は在地の先行型式である栗林式や、後出の箱清水式の壺・鉢・高坏などの口縁部装飾に多用されるが、甕の口縁部に付される例は在地では類例がなく、これも天王山式の影響としうる可能性がある。

27号住居址276は（第73図）、壺形土器の頸部破片であるが、半裁竹管状工具によって右回りの連続刺突（押引き）を2段施文した後に、櫛描波状文を2帯施文し、さらにその下に右回りの等間隔止め簾状文を2帯施している。半裁竹管による連続刺突自体は中期栗林式期にも盛行する文様であるが、在地の後期土器の文様の中には認められず、また文様構成も特異であり天王山式との関連を想定しておきたい。

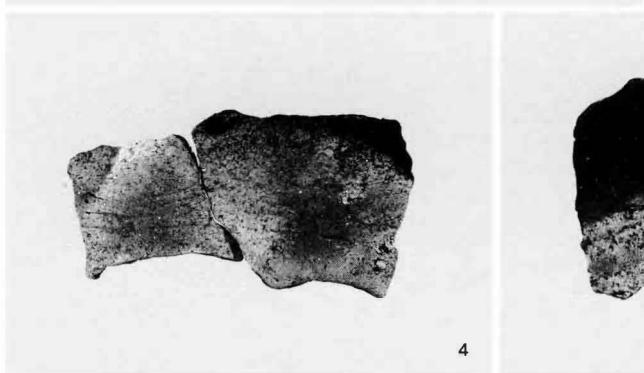
搬入品と考えられる27号住居址の甕型土器（1～5）や16号住居址の甕形土器破片（6）の編年的位置またその型式的特徴について、詳述する力量は持ち合わせぬが、本遺跡は基本的に弥生時代後期前半の吉田式期の單一期の集落遺跡であり、前後する時期の遺構・遺物が存在せぬことよりすれば、これら東北系の土器群は吉田式期に併行するものと想定できる。さらに、天王山式という異系統の土器型式の文様が吉田式の中に取り入れられたと判断しうる7・8・123・182・356などの土器群は、ある程度の時間幅が考慮される天王山式系土器群の中で



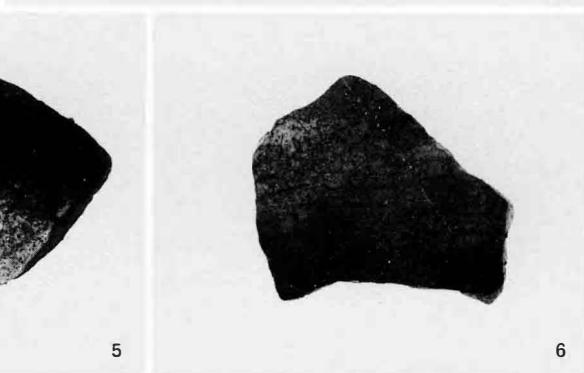
1



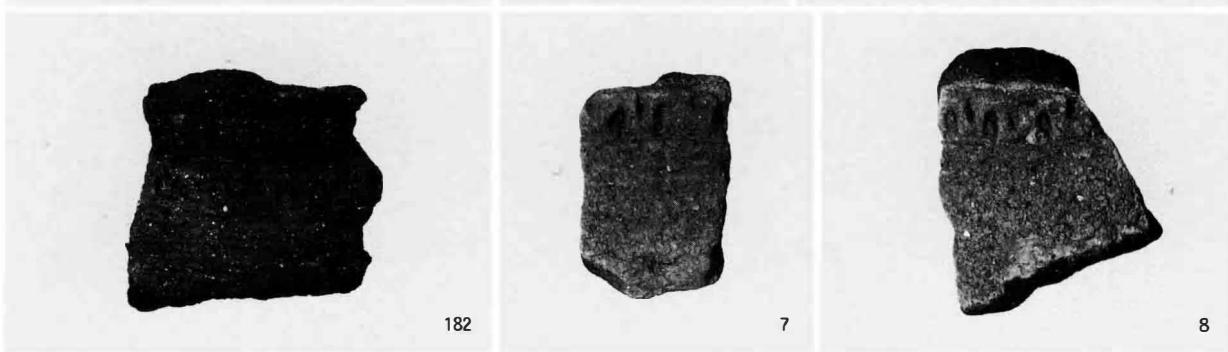
2



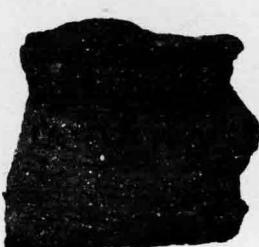
4



5



6



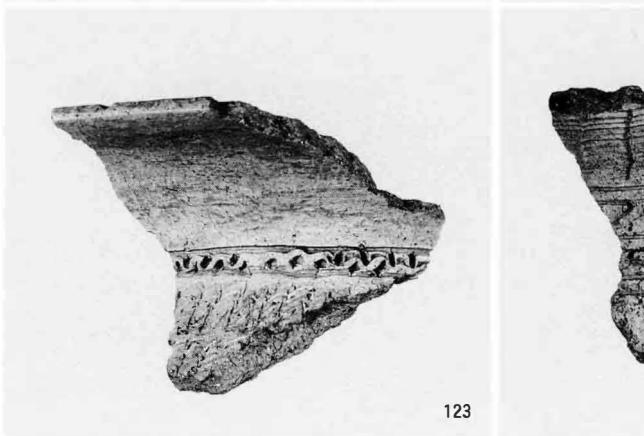
182



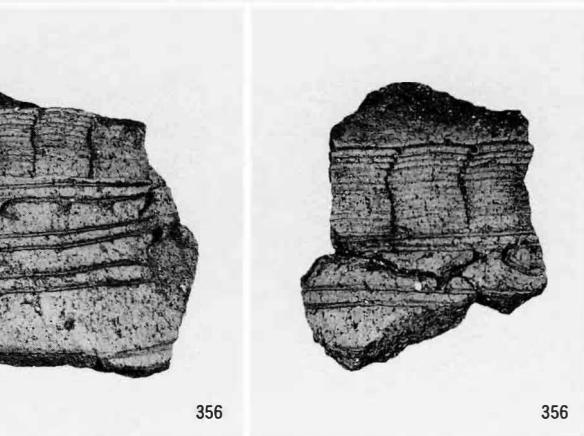
7



8



123



356

356

も、少なくとも交互刺突文が盛行する段階と吉田式とが時間的に併行することを物語る有力な資料といえよう。

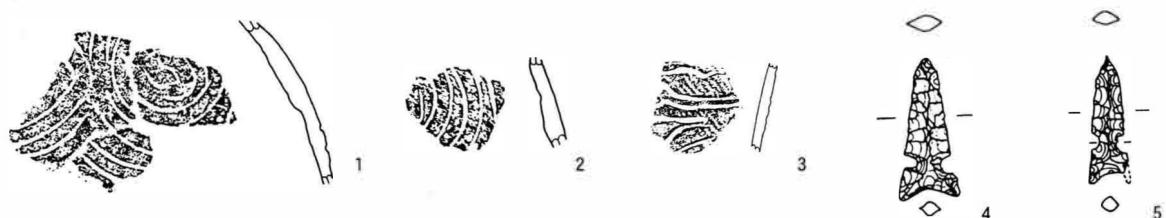
また、これら吉田式土器の中に取り入れられた天王山式土器の文様要素は、いずれも頸部文様としてのみ取り入れられたもので、あくまでもその主体は吉田式である。第5節で述べられるとおり、アメリカ式石鏃に代表される東北的な石器群の製作も、本遺跡内で行われた可能性がきわめて高い点も考慮に入れるならば、これらは、在地の吉田式土器を使用する集団の集落内に天王山式土器を使用する人々が入り込み、ある意味で共存した結果として理解することが可能であろう。

周辺に目を転じると、弥生時代中期終末に位置づけられる長野市松原遺跡S A 118号住居址からは、東北南部の川原町口式の搬入品と考えられる2条同時施文による渦文を持つ壺形土器破片（第97図1・2）が出土している（長野市教委1993・石川日出志2000）。松本市竹渕遺跡では、小破片であるものの天王山式土器が、ほぼ吉田式期に限定される集落から出土しており（3・松本市教委1996）、また中野市間山遺跡では、時間的にやや後出するものの、箱清水式古段階に相当する住居址より完形のアメリカ式石鏃2点が出土している（4, 5・中野市教委1992）。さらに、更埴市屋代遺跡群からも、アメリカ式石鏃類似の石鏃1点の出土が報じられている（長野県埋蔵文化財センター2000）。ともすれば西方にばかり目を向けがちな弥生時代中期終末～後期前半の研究動向の中で、東北系文化の南下現象が長野県域にも無関係ではあり得なかった明確な証拠であり、今後注意が必要であろう。

本稿を草するにあたって石川日出志・中村五郎両氏に種々ご教示賜った。記して感謝申しあげる。（千野）

#### [引用参考文献]

- 石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』第3号  
1998 「下老子笠川遺跡の天王山式土器」『富山県福岡町下老子笠川遺跡発掘調査報告書』  
2000 「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第11号  
中野市教委 1992 『間山-間山遺跡緊急発掘調査報告書-Ⅱ』  
長野県埋蔵文化財センター 2000 『国道403号土口バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 屋代遺跡群』  
長野市教委 1993 『松原遺跡Ⅲ』  
東日本埋蔵文化財研究会 2000 『東日本弥生時代後期の土器編年』  
松本市教委 1996 『竹渕遺跡Ⅱ』



第97図 長野県内出土 弥生時代東北系遺物